

年間第6主日の説教

金 大烈 神父 2011年2月13日(日)

《永遠の命の約束》

おはようございます。

カトリック信仰の中である意味基本的で根本的な信仰は何でしょうか？ それはカトリック信者なら“永遠の命”を信じることです。そうでしょうか？「私はそうは思いません。この世の中の幸せです。」と思われる方はいらっしゃいますか？ いらっしゃらなくて幸いです。私達は永遠の命があることを信じています。しかし、それで終わりではなく、その永遠の命を得るためにこの世の中に生きているうちに正しい心、正しい振る舞いや考えで正しい道を歩まなければならないこともわかっています。ということは永遠の命はいつでも保障されているというものではないことを私達はよくわかっています。わかっているがもうまく生きることはなかなか難しいです。

例えば今日の福音（マタイ5・17-37）で、ある意味でとんでもないことをイエス様はおっしゃったんです。『みだらな思いを持つことさえ姦淫になる。』しかし、皆様、きれいな人が前にいたら「きれいだなあ」と心が傾くのが男の自然な心です。しかしそれさえ許されない、その位厳しくおっしゃっているイエス様の御旨にはわけがあります。私達人間はこのような緊張感を持たずに生きようとすれば誘惑に負けてしまうということを誰よりもイエス様はご存知だったからです。きれいなものをきれいだと思うことは罪ではありません。しかしイエス様がこのように強くおっしゃったのは私達が油断してしまうと流されてしまう、崩れてしまうということを意識して欲しいという教えです。この世の中の時間はあっという間に過ぎてしまいます。そのあっという間に過ぎてしまう時間のために永遠の命を失うという愚かな生き方をしないで欲しい、というイエス様の心からのもどかしい思いの表現ではないかと私は解釈しました。

これからある人のことを紹介したいと思います。その人と初めて出会ったのは10年位前、私が日本に来る前でした。彼の名前はミカエルというのですが、良いことをしましようという集まりのメンバーで、私はある奉仕活動のためにインターネット上で彼と知り合いました。ミカエルは明るい性格で歌が上手く、人と仲良くするタレントを持っている人でした。4か月程前、ある人から「ミカエルが直腸癌にかかって悩んでいますのでお祈りして下さい。」という電話がありました。私は「彼のために祈ります。彼の連絡先を教えてください。」と言って電話を切りました。何日か後に彼から電話がきました。明るい声で「神父様心配しないで下さい。私は負けません。神様が守って下さるから。」私も「ミサの時、あなたのことを思って祈っているからがんばれ。」と励ました。彼の声を聞いて一安心はしましたが、彼はまだ42歳ですから、明るい声やその言葉に返って辛い気持ちにもなりました。私が休暇で韓国に帰国する2週間前に韓国の人から電話がきて「今危ない状態です。医者は2ヶ月位が鍵だと言っています。」と知らされました。私はその時決心しました。彼の療養している病院は釜山で

私の行く母の家からは結構遠いし、旧正月にぶつかるので道が混むのですが、必ず見舞いに行って病者の秘蹟を受けようと思いました。私は今回の帰国でいつ別れることになるかわからない年若い母とできるだけ多くの時間を過ごそうと計画していましたが・・・向こうへ行って1週間位に「ミカエルが神父様に会いたいと切に願っている。」という連絡がありました。私は母が行っている教会で病者の秘蹟の用意をしてすぐに自動車を走らせました。彼は病人にしては明るい顔で私を抱きしめてくれました。その姿にもっと心が痛くなりました。そこには10数人が集まり彼のお母さんと妹さんもいました。私ができることはミサしかないと思い、ミサの中で臨終の秘蹟することにしました。ミサの用意はしてこなかったのでぶどう酒と食パンでミサをしました。本人以外は皆涙でミサが続けられないほどでした。本人は笑顔でミサに与かっていました。彼は3年前に結婚し、ようやく赤ちゃんを授かってこの数日中に生まれる予定でした。美しいミサができました。ミカエルは「前にも申し上げたように私は負けません。最善をつくします。もし失敗しても悪い思いはありません。ただ私が神様に申し訳なく思っているのは、人に心からの最善をつくさなかったことばかりが思い浮かぶことです。それを償う時間を頂きたい。」と言いました。

昨日、夕ミサの3時間前に連絡があり、今日か明日神様から呼びかけられるでしょうということでした。私はまじめに祈ったしミサも捧げ、彼の意志も強かった、何より彼の中には悪い思いがなかったから神様は祈りを聞いてくれるんじゃないかという自分なりの希望を持っていたのです。でも今日か明日に呼びかけられると聞いて「ああこのことは聞いてもらえないんだ。」何回も体験して何度も乗り越えて、自分はこれを昇華しながらきたと思っていたが、又このようなことにぶつかる自分とはまらない気持ちに落ち込むんだともう一回体験しました。それで昨夜のミサで彼のために祈っているとき感情が溢れてしまった姿をみせてしまいました。司祭としてこういうことは結構あります。親しい人が亡くなる場合もあるし、名前を覚えていない人が亡くなる場合もあります。私は司祭になって20年位たちますが、なかなか慣れません。どのような言葉でどのようにその家族を慰めればよいかわからなくなることが多いです。

もう一回皆様に申し上げます。このように何もできない立場になり、無力感を感じる時、それを乗り越える唯一のことは永遠の命の約束です。永遠の命なんかあまり考えたくない、関心はない、興味もないと言いながら過ぎてしまうのが私達の人生だと思います。ですから目の前のものばかり見て悩んだり苦しんだり欲望を持ったりする生き方をします。しかし私達が初めから最後まで考えなければならぬことは永遠の命の約束です。その若さで死んでしまうかもしれないミカエルという青年、子供を残して逝かなければならない辛さ。このような辛さがあっても彼に行なわれた業を考えると、この世がすべてでなく約束された永遠の国が待っていることを好奇心ではなく希望として私たちは心に置かなければならない。そうでなかったらこの世の中理解できないことばかりです。皆様これから皆様の身内にいろいろなことが起きた時、慰めが必要な時この信仰を思い出して下さい。

ありがとうございました。